

我家のおせちには、毎年ベトナム料理が並ぶ。バナナリーフに包まれたもち米の中に、豚肉と緑豆のペーストが、スパイスと融和し絶妙な味わいを醸し出す。そんなベトナムの正月料理、ヴァンテットが我家の食卓を飾るようになって、どれくらい歳の歳月が流れたのだろう。

思えば、私がベトナムに思いを寄せ始めたのは、ベトナム戦争がきっかけだった。一九六七年当時、私はまだ小学六年生、戦争の惨禍をテレビで見るたびに、幼心に胸が痛んだ。

「私にできることはないか」

逃げ惑うベトナムの子供たちへの思いは年々募っていった。

一九七五年、私が二十歳の時、十五年に及ぶベトナム戦争は、ようやく終結した。しかし、その後、新体制に不安や不信を抱く人たちが大量に国外に流出し始めたのだ。ベトナムやカンボジアなど、インドシナ地域から海外へ亡命する難民、いわゆるボートピープルと呼ばれる人たちである。その中には、沖縄の小島に漂着した後、私の住む熊本の施設に移された人もいた。

一九八二年、そんな彼らを案じていた私に、熊本市内の難民センターで日本語を教えるボランティア募集の話が舞い込んだ。私は早速、そのセンターを訪ねることにした。

人懐っこい子らが目を輝かせながら、私の周りに集まって来る。みんな十代から二十代前半の若者だ。

「こんにちは」

気軽に声をかけると、片言の日本語で出身国や自分の名前を教えてくれた。難民というイメージとは逆に、屈託のない彼らの明るさが印象的だった。あいにく時間の調整がつかず、ボランティアの仕事は実現せずに終わったものの、爾来、そこで出会った数人のベトナム人との交流が始まったのである。

数日後、彼らは市内からバスで小一時間かけて、片田舎の我家を訪れた。昼食に日本の家庭料理で持て成すと、彼らはベトナムの春巻きを作って感謝の意を表してくれた。小さな台所は、彼らの笑い声とベトナム料理独特の香りで一杯になった。しかし、母国に残した家族の話題になると、笑顔の裏に彼らの悲しい過去が垣間見える。私を姉のように慕う彼らに、少しでも楽しい思い出を作ってほしいと、その後も親しく交流を深めていった。

しかし、翌年の春、やっと熊本での生活にも慣れてきた頃、にわかには別れの話がもち上がったのだ。それは難民の流入増加や滞留の長期化に対処するため、国際支援センターが東京の

品川に開設されたからである。彼らは、またもや新しい土地への移住を強いられた。

熊本を発つ日が近づくと、永遠の別離を惜しむかのように、彼らから手作りの工芸品がお礼の手紙とともに届けられた。たどたどしい日本語でも、思いは充分に伝わってくる。家族と離れ、言葉も習慣も違う国で、頼る当てもなく生きていかねばならない人たち。私が彼らの立場なら、どんなにか不安だろう。

「遠く離れていても、いつも見守っているから、大丈夫よ。安心してね」

私はたえず手紙を書いて励ました。

こうして、新しいセンターで三ヶ月余り、日本語の学習に専念した彼らは、それぞれの道へ独立していった。何の音沙汰もなく数年が経ったある日、心配していた私の元に突然、結婚式の招待状が届いた。彼らの一人が、同じ境遇のベトナム人女性と結婚するというのである。私も飛んでいってお祝いしたかったが、遠路ということもあって、残念ながら、出席は断念せざるを得なかった。苦境の中にあって結ばれた二人の人生の門出に、私は遠くからエールを送りつづけた。

それからまもなく、子宝に恵まれたという嬉しい便りも届いた。しかし、生活は依然厳しそうだ。ご主人は職を転々とし、それを支える奥さんは、幼子を抱え、テレビの部品組立の内職をしているという。そんな彼らのため、私にできることといえば衣類や地元の野菜に、心ばかりの小遣いを添えて送ることぐらいであった。

一九九六年、久々にフェリーで上京することになった私は、川崎港で一組のベトナム人夫婦に会う約束ができた。下船すると、二人のかわいい幼子連れ、懐かしい顔が揃って私を出迎えてくれた。私は腰をかがめ、女の子の手をとり尋ねた。

「お名前は？」

「ふるかわ さくらです」

五歳になったばかり女兒は、あどけない表情で答えた。年下の男の子からも、

「ふるかわ たから」

と元気な声が返って来た。

「あれ、私と同じ名前ね？」

そう言って首をかしげると、夫婦は、

「お姉さんの名字をもらいましたよ」

と恥ずかしそうに笑っている。それは子供のいない私にとって、なんとも嬉しいサプライズであった。彼らの友情に、信頼に、たちまち私の胸は熱くなっていく。と同時に、責任の重さをえ感じさせるのだった。

(この子らがすくすくと成長し、どんな困難をも乗り越えて、幸せになりますように！)
そんな願いをこめて、誕生日とクリスマスには、小さなプレゼントを贈ることにした。

時は流れ、彼らの日本での生活も安定してきたかに見えた。中には、仕事に成功し、マイホームを建てる人もいる。子供をアメリカに留学させる人、オーストラリアに移住する家族も出てきた。

しかし、年を重ねるにつれ、ベトナムに残した高齢の両親の健康を気遣う、彼らの共通の姿がそこにはあった。電話の向こうから、病床の親へのやるせない思いを訴える人たち。私はただ、彼らの心痛に、時間を忘れ耳を傾けた。とはいえ、私には、彼らの悲しみ、喜びに寄り添うことしかできなかった。

そうした中、私の身边にも同様、悲しい出来事がふりかかった。父を亡くした後、重篤の母の看護に追われる身となっていたのだ。

「お姉さん、困っているんでしょう」

一人のベトナム女性には、そうつぶやくと、多額のお見舞いを送金してくれたのである。母の入院や介護に何かと出費がかさなり、やりくりに算段していた時であった。そんな私を救ってくれたのは、かつてポートピアールとして、無一物で日本にやってきた彼らの一人だったのである。私は思わず涙が溢れた。胸に熱いものが込み上げてくる。支援し、支援される関係から、私たちはいつしか、一人の人間として、人生の悲哀を、喜びを心から語り合える友人となっていたのだ。荒波を乗り越え、強くたくましく生き抜いた人たちの優しさが、私の心に深くしみ込んでいった。

二〇一〇年春、成人式に晴れ姿でポーズをとる桜ちゃんの写真が届いた。港で出会ったあの幼子が二十歳はたちになって、私の住む九州へ遊びに来たいというのだ。久々に帰省する孫娘を迎える祖母の心境だろうか。

十数年振りの再会に興奮気味の私は、新成人として、胸を張って社会に巣立った桜ちゃんを出迎えた。日本に生まれ育った彼女にとって、両親の母国ベトナムには馴染めないものがあるらしい。それでも、彼女は手際よく、ベトナムの生春巻きを作ってご馳走してくれた。日本の文化をしっかりと学びたいと抱負を語る彼女の瞳が頼もしい。

二年後、弟の宝くんも、我家を訪れた。リュック片手に、青春十八切符で各地を回る大学生だ。世界一周を夢見る彼の弾ける若さがまぶしい。我家が、彼らの第二の故郷になればと願うばかりだった。

しばらくして、桜ちゃんからメールが届く。

「おばさん、大丈夫ですか」

九州に台風が上陸し、洪水の被害が報道されたからである。見守っていたはずの私が、いつのまにか見守られる存在になっていた。

振り返れば、ベトナムの人たちと出会ってすでに三十年余の歳月が流れていた。その間、当初芽吹いた友情は、風雨に晒さらされながらも、枝を伸ばし、大地に根をはり、やがて花を咲かせ揺るぎないものになっていった。これまでの細やかな民際交流を通して、思いもよらぬ恩恵に浴していたのは、ほかでもない、自分自身ではなかったか、私は改めて気づかされたのである。

「お姉さん、ベトナムに行きましょう」と毎年誘われながら、時間ばかりが過ぎていく。還暦を前に、まだ訪れたことのないベトナムへの思いは増すばかりだ。そこには貧しくて学校に行けない子供たちが、まだ大勢いるという。

「私にできることはないか」

今年も送られてきたベトナムの正月料理、ヴァンテットに舌鼓を打ちながら、私は現地の子供たちとの出会いを夢み、新たな民際交流に思いを馳せている。